２．冠動脈疾患死亡の危険因子の追跡期間による関連変化：NIPPON DATA80

研究協力者　岡見　雪子（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　特任助教）
顧　問　　上島　弘嗣（滋賀医科大学アジア疫学研究センター　特任教授）
研究協力者　中村　保幸（山科武田ラクト健診センター　センター長）
研究協力者　近藤　慶子（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　助教）
研究分担者　門田　文　（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　准教授）
研究分担者　奥田奈賀子（人間総合科学大学人間科学部健康栄養学科　教授）
研究分担者　大久保孝義（帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座　教授）
研究協力者　宮松　直美（滋賀医科大学看護学科臨床看護学講座　教授）
研究分担者　岡村　智教（慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室　教授）
研究代表者　三浦　克之（滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　教授）
研究分担者　岡山　明　（合同会社生活習慣病予防研究センター　代表）
NIPPON DATA80 Research Group

【目的】日本人代表集団の 29 年追跡データにおいて、冠動脈疾患(CHD)死亡の危険因子(喫煙、高血圧、高コレステロール血症、糖尿病)の追跡期間の違いによる関連の変化を検討する。

【方法】NIPPON DATA80（29 年追跡）対象者 10,546 人のうち、データ欠損、CHD 既往、エネルギー摂取量 1 日 500kcal 未満または 5,000kcal 以上を除外し、8,396 人(男性 3,745 人)を解析対象とした。ベースライン時の危険因子(①喫煙、②収縮時血圧(SBP)、③血清総コレステロール(TC)、④糖尿病)と、追跡 10 年後、15 年後、20 年後、25 年後、29 年後の CHD 死亡リスク(ハザード比(HR)、95%CI)について検討し、HR の経時変化を評価した。調整変数は、年齢、BMI、飲酒頻度とした。

【結果】男性において、喫煙と TC の 1 標準偏差上昇あたりの CHD 死亡 HR は、追跡 10 年後が最も高く(喫煙; HR 3.23 [95%CI 1.16-9.02], TC; HR 1.82 [95%CI 1.29-2.57])、その後追跡年延長毎に低下した。糖尿病と SBP の 1 標準偏差上昇あたりの CHD 死亡 HR は、追跡 29 年後から最も高くなった(糖尿病; HR 2.30 [95%CI 1.37-3.85], SBP; HR 1.23 [95%CI 1.00-1.50])。女性において、糖尿病の CHD 死亡 HR は、追跡 20 年後から有意に高くなり(HR 2.53 [95%CI 1.19-5.36])、追跡 29 年後まで高かった(HR 2.47 [95%CI 1.40-4.35])。

【結論】男性において、喫煙と TC は、追跡 10 年の CHD 死亡リスクと強く関連した。一方、男性の糖尿病と SBP および女性の糖尿病は、追跡 20～29 年の CHD 死亡リスクと強く関連した。CHD 危険因子の評価として妥当な追跡年数は、性別および危険因子により異なった。

第 56 回日本循環器病予防学会学術集会　(2020.12.1～21　Web 開催（オンデマンド配信）)
***Circulation Journal.* 2020 Dec 10. doi: 10.1253/circj.CJ-20-0739. Online ahead of print.**